

大阪大学 図書館報

Vol.37 No.4 (2004年 3月)

目次

読書と学問：本にまつわる二題	1
懐徳堂アーカイブから大阪大学アーカイブへ	4
平成15年度学術ポータル担当者研修を受講して	6
教官著作寄贈図書	7
お知らせ	7
会議・日誌	8

読書と学問：本にまつわる二題

川北 稔

ブックッシュであること

英語に「ブックッシュ(bookish)」という形容詞がある。

人についていう場合は、本ばかり読んでいて、実際のことを知らない頭でっかちというくらいの意味である。いわば、「本の虫」というところかもしれない。知識のタイプなどをいう場合は、あまり実践的でない「机上の空論」のことで、いずれにせよ、元来、あまりいい意味ではなく、書齋的で、いささか浮世離れしていることを揶揄する言葉である。

ところで、bookish であることは、いまや別の

方面からも、しばしば揶揄の対象となっている。コンピュータ・ネットワークが展開し、デジタル化された「学術情報」が素早く全世界に広がるようになった結果、「本」を読んでいる人間は、「本」に込められた「アナログ」情報とともに、いかにも時代遅れと見なされがちだからである。情報化は政府の大方針でもあるので、情報化といえは予算も下りるが、いまだき「書籍」を購入するというような目的では予算も取れないことは、よく知られているとおりである。学術雑誌の多くはいわゆる電子ジャーナル化し、大学内にさえ、もはや大型コンピュータさえあれば、図書館など

いらなくともそぶく人もいないわけではない。

しかし、bookishであることは、それほど時代遅れのことなのだろうか。「情報」の流れが「速い」ことにはそれほど意味があるのだろうか。

「情報」の流れが「速く」なったことでわれわれは幸福になったのだろうか。そもそも、ネットに流れる情報は、かつて書物が伝えたそれと同質のものではなく、微妙に変質してきているのではないか。それはたんなる「情報」であって、「知」というようなものではないようにも思えるのだ。というより、ネット上の「情報」は、どうみても無責任なおしゃべり以上のものではない。bookishな知識より、遙かにうつろなものと感じるのは私だけだろうか。

国立大学の図書館では、ここ数年、学内で生産される「学術生産物」を「情報発信」することを強く求められている。「情報発信」という言葉が、いまやお題目のように繰り返されていると言ってもいい。

一般に、文系の学問、とくに人文学系のそれは、個人単位でなされていて、大学単位ではなされていないし、個人を超える連携となれば、大学の枠などこえて、他大学で同様のテーマを扱っている研究者とのあいだで成立している。研究室単位で研究活動の成立している理系の多くの分野とは本質的に異なっているのだ。だから、人文学系では、「学術生産物」は個人でなければ、大学とは必ずしも結びつかない集団の単位で求められるべきであって、大学単位の「学術生産物」を求めるほどばかげたことはない。ところが近年の「改革」は、ことごとく大学間競争を勧めるものばかりである。「情報発信」だけでなく、COEも、「評価」も、ことごとく同じ方向を指している。大学間競争の激化は、これまで成立していた大学の枠をこえた協調を破壊しかねないと危惧される。

せっかくの全国的な研究者のネットワークを、「大学間競争」が破壊するようなことになれば、それこそ「角を矯めて牛を殺す」愚拳というべきであろう。3年前、あまり大した予備知識もないままに館長に就任してまず驚いたのは、国立大学

附属図書館の全国的なネットワークのすごさであった。「大学間競争」というお題目のもとに、このネットワークの機能が低下しないことを祈りたい。

ネット情報の最大の利点は、いうまでもなく、そのスピードである。しかし、人文学の徒にとっては、そもそもネットで伝達される情報の「速さ」はそれほど問題ではない。反対に、400字詰原稿用紙で1000枚を優に超えることがごくふつうである文学博士の学位論文は、その全文をコンピュータの画面で読むことなどあまり現実的でもない。週刊誌か、コンピュータの画面で読める程度の文章しか読まない世代は、劇的に読書力が落ちている。かつては、「軽い」読書の典型であった「新書」が、大手をふって「読書」の対象となつてすでに久しい。物事すべて、パワー・ポイントでスクリーンに映し出した数行の箇条書きで足りると考えるのは、知的にはあまりにも貧困である。

インターネットの時代だからこそ、むしろ、積極的に「ブッキッシュ」であることには、特別の意味があると思うが、いかがであろうか。伝統的な図書館の意味は、情報化の進展に伴ってますます高まりこそすれ、衰えることはありえない。

ファリンドンの古本市

かつて、古本屋めぐりという趣味があった。いまも中年以上の世代では一部に残っているかもしれないが、学生文化としては、すっかり姿を消したようである。古書は、ネットで発注する時代になった以上、それも当然のことかもしれない。「古本屋の親父」といえば、それだけで、誰でもが思い浮かべることのできたある種の人物像も、いまの若者にはあまり親しみがないようで、そうした人物像も、日本の文化シーンから姿を消しつつあるのだろう。情報化とともに、古本市場の東京へというか、神田への一極集中がすすみ、大阪や京都には、古本屋街というほどのものも少なくなった。

事情は、たとえばイギリスでも同じで、かつて

多数存在した大きな古書店が、つぎつぎと姿を消している。それでも、イギリスの場合、なお、バースやタンブリッジウェルズやブライトンのような温泉都市や海水浴都市など、かつての社交・観光都市には、町の規模からすると異様に大きい古本屋がある。古書マニアの友人の「学説」によると、それはかつて、これらの町に長逗留したバカンス客のための貸本屋の名残りだという。彼の「学説」が正しいかどうかよくはわからないが、確かに、それらしい節はある。ここでいう貸本屋とは、かつて「サーキュレイティング・ライブラリ」として知られたもののことで、日本ではしばしば誤って、「巡回図書館」などと訳されてきたものである。最近、日本の公共図書館が、ベストセラーの新刊書を大量に買い込んで貸し出し、著作権者からの批判を招いているが、それなどさしづめ、図書館の「巡回図書館」への先祖返りというべきかもしれない。

ところで、私のイギリス史研究仲間でもある友人・知人のなかに、強烈な古書マニアというべき人が2人いる。そのひとりで私より年下の友人は、在外研究のために過ごしたカンタベリで、古書店の向かいの家に住み、毎日、大金を投じてせっせと前の店から古書を買って帰る。帰国の日が近づいて、はたと気がついてみると、住んでいた借家は古書で満杯になっていた。日本のマンションにこれを持ち帰っても収容できるはずがないことによく思い至った彼は、また、向かいの古本屋の親父にほとんどの古書売り飛ばすほかなかったのである。親父が、わが友人を神様のように扱ったことはいうまでもない。

彼にも負けぬマニアである年上の知人は、吉野の山林地主の家柄とあって、その財力にものをいわせ、イギリスの古書店協会の会長の家に寝泊まりして、胴巻きに現金を巻いて古書市場に買い出しに行くのが、毎年恒例の行事としていた。

こういう強烈な人たちにはおよびもつかないが、かくいう私も、歴史家の端くれだから、本や古本の市には多少の興味はある。だから、私にも、このイギリス古書のマニアたちにさえ自慢ので

きる経験がひとつだけある。

いまでは日本でも珍しくもないが、昔からのロンドン名物に、ストリート・マーケットがある。何十年も以前でも、立派なガイドブックが出版されていたりして、ペティコートレインやポートベロのそれは、観光名所としても知られてきた。そういうガイドブックで見つけたストリート・マーケットに、シティのはずれのファリンドンにあるという古本のそれがあったから、是非一度行きたいと思っていた。そのうちに、たまたま本職の研究で、17世紀にイギリスからアメリカへ「身売り」のかたちで渡った人びと 当時の移民の大半はこのかたちであった の「身売証文」を調べるために、しばらくその近くのグレイター・ロンドン古文書館兼図書館に通うことになった。グレイター・ロンドンというのは、日本でいえば東京都のような行政区で、のちにサッチャーが廃止してしまうことになるが、当時はなお、立派に機能していたものである。ともあれ、絶好の機会の到来とばかりに、ガイドブックにある開催日時に、私はファリンドンの現場を訪ねた。

ところが、どうしたことが、現場にはシートをかぶせた台車が数台あるだけで、人の気配もない。しばらく待ってみたが、マーケットの始まる気配もないので、情報が古いのか、何かの間違いだらうと思って帰ろうとした。そのとたんである。あちこちの建物の影から突然、2・30人の人影が現れ、そのうちの一人が台車のシートをめくった。まわりにいた男たちは、血走った目をしていっせいに台車に群がり、台上の古書を猛烈な勢いでひっくり返し始めた。唖然としているうちに、ことは終了し、男たちは蜘蛛の子を散らすように去っていき、あたりはまた、もとの静けさに戻ってしまったのである。長い間楽しみにしていた「古本のストリート・マーケット」は、ほとんど一瞬の「出来事」であったのだ。

落ち着いて思い出してみると、ここに集まった男どもは、台上に置かれている個々の古本の位置まで熟知していて、その日新たに売り出されたものがどれとどれであるかも、ひと目で分かるよう

であった。しかも彼らが求めていたのは、たんなる古本ではなく、グラビアのある雑誌であった。そういえば、古雑誌のグラビアを引きちぎって、きれいに表装をほどこし、額にまで入れて土産物などにするのは、ロンドンでは普通のことである。だから、ここに集まっていたのは、その手の業者やマニアであって、事情を知らない私などはただ、呆然と成り行きを見守るしかなかったのも当然である。だまされた経験や、親切にされた経験など、イギリスの古本屋にまつわる思い出はいろいろ

あるが、これほど驚いたことは、ほかになかった。

十数年沈滞をきわめた芥川賞を活性化するにも、受賞者の性別と若さしか「売り」がないという状況が、文学や、ひろく活字文化の現状を露骨に象徴している。古本屋めぐりを趣味とするような学生生活は、いまさら取り戻しようもないが、そこには、たんに老人の懐旧心を誘うというだけではない意味があったような気もする。

(かわきた・みのる 文学研究科教授、図書館長)

懐徳堂アーカイブから大阪大学アーカイブへ

湯 浅 邦 弘

「アーカイブ」の時代

「アーカイブ archive」とは、古文書、公文書の保管や保管庫を表すことばです。記録室・保管庫のことを「アーカイブズオフィス archives office」、その担当者のことを「アーキビスト archivist」と言います。

最近では、インターネットの普及に伴って、電子情報としての保存「デジタルアーカイブ digital archive」が注目されています。ここでは、紙に記された情報だけではなく、画像や音声なども保存や活用の対象となります。

こうした「アーカイブ」への関心の高まりを受けて、平成 15 年（2003）11 月 28 日、（財）懐徳堂記念会、大阪大学文学研究科、大阪大学附属図書館、全国歴史資料保存利用機関協議会近畿部会の共催事業として、「懐徳堂アーカイブ講座」が開講されました。

懐徳堂アーカイブ講座

会場は、附属図書館新館 6 階。講演、資料解説、懇談会の三部構成で行われました。

まず、島根大学助教授の竹田健二先生による「大正天皇に献上された『懐徳堂紀年』」の講演

がありました。

この講演は、今年度の資料調査によって新たに発見された情報に基づくものです。大正 3 年（1914）、陸軍大演習統監のため大正天皇が大阪に行幸した際、懐徳堂記念会は懐徳堂の歴史を一冊の書にまとめて天皇に献上します。それが『懐徳堂紀年』です。現在、献上された正本が宮内庁書陵部に、副本二部が懐徳堂文庫の^に新田文庫・^{ほくざん}北山文庫に収蔵されています。竹田先生は、北山文庫本には含まれていた一枚のメモを起点として、『懐徳堂紀年』の来歴を突き止められました。また、その成立に関わった^{なかいつくまる}中井木菟麻呂と^{にしむらてんしゅう}西村天囚の人間ドラマについても触れる興味深い内容でした。

中井木菟麻呂は、懐徳堂で歴代の学主（学長兼教授）を務めた中井家の子孫で、明治 2 年に懐徳堂が閉校となった後、その再興に向けて努力します。

一方、西村天囚は、朝日新聞に「懐徳堂研究」を連載し、大正 5 年の懐徳堂再建に中心的な役割を果たします。この両者には、懐徳堂の復興をめぐる、これまで知られることのなかった確執があったのではないかと考えられるのです。

こうした発見が、附属図書館の書庫の中で行われたことは、資料整理と実見調査の重要性を改めて教えてくれます。

また、この講座では、懐徳堂文庫の貴重資料を公開し、実物を示しながら解説が行われました。さらに、これまでの懐徳堂デジタルコンテンツを集大成した「WEB懐徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」について解説を行いました。資料解説・WEB解説に御協力いただいたのは、寺門日出男(都留文科大学教授)、矢羽野隆男(四天王寺国際仏教大学助教授)、井上了(文学部懐徳堂センター非常勤職員)、森田敬子(凸版印刷株式会社)の各氏です。

貴重資料やデータベースを目の前にして、専門家による解説が行われ、参加者には大変好評でした。



懐徳堂アーカイブ講座貴重資料解説(閲覧室)

大阪大学アーカイブの構想

一般参加者が退出された後、懐徳堂・大阪大学関係者、附属図書館職員、全国歴史資料保存利用機関協議会近畿部会会員によって懇談会が行われました。

まず伊藤祐三事務部長の開会の挨拶に続き、情報サービス課の森稔夫課長から、「大阪大学附属図書館における貴重資料の保存と活用について」と題し、附属図書館の現状について詳細な報告がありました。



懐徳堂アーカイブ講座懇談会(研修室)

これに続く質疑応答では、予定時間を延長して、充実した討論が行われ、現在、懐徳堂記念会で、その模様をテープ起こしする作業が進んでいます。

この内、大阪大学に関わる重要な討論の概要を、取り急ぎ以下に記しておきます。

(1) 懐徳堂文庫という貴重資料を抱えながら、大阪大学内に専任スタッフが配置されていないのは問題である。

(2) 資料の電子情報化(デジタル化)とともに、一次資料の適切な保存、フィルムによる画像の蓄積が必要である。

(3) 歴史資料の他にも、評議会・教授会資料を初めとする公文書のアーカイブが適切に行われる必要があり、「大阪大学アーカイブ」を構築し、推進することが重要である。

こうした講座を経て、懐徳堂文庫の貴重資料については、これまでのデジタルコンテンツを集大成した「WEB懐徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」がインターネットで公開されました。附属図書館ホームページからもアクセスできます。懐徳堂アーカイブの時代を体感して下さい。

この成果は、大阪大学全体のアーカイブを進める上でも、大きな手がかりとなるでしょう。懐徳堂アーカイブから大阪大学アーカイブへ。時代は、次の飛躍を求めています。



WEB懐徳堂トップページ

(ゆあさ・くにひろ 文学研究科教授・附属図書館研究開発室員)

【参考URL】

- WEB懐徳堂
<http://kaitokudo.jp/>
- 懐徳堂記念会
<http://www.aianet.ne.jp/~kaitoku/>
- 懐徳堂センター
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/>
- 懐徳堂と中国古典の世界
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/kaitoku/index.htm>

平成 15 年度学術ポータル担当者研修を受講して

大西直樹

国立情報学研究所が今年度新設した標記研修が平成 16 年 1 月 14 日～16 日に開催されました。

カリキュラムは次のような内容でした。

ポータル概要 / メタデータ / ポータルシステム概論 / WEB デザイン / ポータルサーバ管理・運用 / 情報発信の法律問題 / ポータル構築 / 事例報告・研究協議

全般的に、各講義のテキストも多く時間も 3 日間を一杯に使った充実した研修でした。

「ポータルシステム概論」と「ポータル構築」を同じ講師が担当され、計 10 時間 10 分と全 21 時間 10 分の約半分を占める構成で、内容もこの 2 つが中心となっています。

ポータルは新規構築することだけでなく、その維持管理や使ってもらうための日常的・継続的活動が重要であること、このための人員・経費には相当の負担を想定すべきことなど示唆に富んだ話がありました。

残念な点としては、内容が一般的(民間的?)ポータルに即したものであるため、今回の受講

生が期待したであろう「学術ポータル」= 大学環境におけるポータル機能についてという視点からの説明が不足しているように思われたことが挙げられます。他の講義でも内容が大学環境を十分には考慮されていないと思われるものがありました。

学術情報の入手方法が多様化し、また環境変化が速い近年の状況下、研究者、学生の皆さんが適切な情報を容易に入手できるようにするための一つの方法として、ポータルシステムについても実現を検討していく必要があります。そのための手がかりを得ることができた研修でした。

新しい研修を立ち上げるには大変なエネルギーが必要であろうことを思うと、このような研修を企画・実現していただいた国立情報学研究所に感謝し、是非今後更に充実していかれることを期待しています。

(おおにし・なおき 情報サービス課 専門員)

教官著作寄贈図書

(2003.12 ~ 2004.2)

本館	
蒲生健次 (名誉教授)	Ion beam modification of materials : proceedings of the Thirteenth International Conference on Ion Beam Modification of Materials, Kobe, Japan, 1-6, September 2002 / editors, Kenji Gamo ... [et al.] Amsterdam] : Elsevier, 2003
川村邦光 (文、教授)	語りと実践の文化、そして批評 = Critiques cultures of the narrative and and the practice / 川村邦光編 豊中 : 文化/批評[cultures critiques]編集委員会, 2003
新宅彰 (経済、非常勤講師)	通貨・金融の歴史と現状 : 金融政策の視点 / 新宅彰 東京 : 日経事業出版センター, 2003
山口節郎 (名誉教授)	現実の社会的構成 : 知識社会学論考 / ピーター・バーガー, トーマス・ルックマン著 ; 山口節郎訳. 新版. 東京 : 新曜社, 2003
松尾隆祐 (名誉教授)	Atom Tunneling, phenomena in physics, chemistry and biology / ed. by T. Miyazaki. (Springer series on atomic, optical and plasma physics ; 36) Berlin : Springer, 2004
生命科学分館	
中村仁信 (医、教授)	The Asian-Oceanian Textbook of Radiology / editors : Wilfred C G Peh , Yoshihiro Hiramatsu Singapore : TTG Asia Media, c2003
平野俊夫 (医、教授)	Signal transducers and activators of transcription (STATs) activation and biology / edited by Pravin B. Sehgal, David E. Levy and Toshio Hirano. Printed in the Netherlands : Kluwer Academic Publishers, 2003
吹田分館	
弓場愛彦 (基、助教授)	Ion beam modification of materials : proceedings of the Thirteenth International Conference on Ion Beam Modification of Materials, Kobe, Japan, 1-6, September 2002 / editors, Kenji Gamo ... [et al.] [Amsterdam] : North-Holland, 2002

(敬称略 : 受付順)

お知らせ

時間外開館の拡大について

平成 15 年 4 月より本館では、授業休業期間中 (と土・日開館) を試行していましたが平成 16 年の開館時間拡大 (平日開館時間を 19 時まで延長 4 月より本実施いたします。

INIS データベースサービス開始

INIS (国際原子力情報システム) データベースを本学内から無料でお使い頂けるようになりました。

同データベースは、IAEA (国際原子力機関)

によって収集された原子力文献情報のデータベースで、1970年から現在までの240万件以上の文献が提供され、毎週更新されています。

[URL] <http://www.iaea.org/inis/inisdb.htm>

自動貸出装置の導入

図書の貸出手続きを利用者の方が直接行うことができる自動貸出装置が導入されることになりました。本館に3台、吹田分館に1台

が設置される予定で、平成16年度からの運用を予定しています。

吹田分館の退館管理システム機種更新

図書の貸出手続きの有無をチェックするブック・ディテクション・システムが、新し

い機種に更新されることになりました。平成16年4月からの運用を予定しています。

会 議

「電子図書館システム専門委員会」・「サイバーメディアセンターデジタルコンテンツ委員会」合同委員会

12.12(金) 10:30~11:30

1. 平成15年度データベース・サービスについて協議した。

図書館委員会

12.16(火) 10:00~11:25

1. 次期附属図書館長候補者として、中村仁信医学系研究科教授を総長に推薦することとした。
2. 法人化に伴う諸規程の改正について協議した。
3. 平成16年度以降の電子ジャーナル経費の部局分担方式について協議した。
4. 平成15年度研究開発室室員1名の追加推薦が承認された。

生命科学分館運営委員会

2.19(木) 10:00~12:00

1. 次期分館長候補選挙の結果、辻本賀英教授が分館長候補となった。
2. 「生命科学分館運営委員会のあり方」について平成16年度の継続検討事項となった。
3. 利用内規の情報公開対応改定について原案のとおり了承された。
4. 平成16年度電子的資料の対応について検討された。
5. 平成16年度開館スケジュール等について原案どおり了承された。

日 誌

H15.12.8	外国雑誌センター館幹事会	(東京工業大学)
H15.12.12	「電子図書館システム専門委員会」・「サイバーメディアセンターデジタルコンテンツ委員会」合同委員会	(生命科学分館)
12.16	図書館委員会	(本館)
H16.1.9	法人格取得問題に関する附属図書館懇談会	(東京大学)
1.19	近畿地区医学図書館協議会例会	(奈良県立医科大学)
1.22	国立大学附属図書館事務部長会議	(富山大学)
2.19	生命科学分館運営委員会	(生命科学分館)

大阪大学図書館報 Vol.37 No.4 通巻 149号 2004年3月15日発行
発行所 大阪大学附属図書館 豊中市待兼山町1の4 06(6850)5070
e-mail : sanko-honkan@library.osaka-u.ac.jp